
初めて

ホチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初めて

【Nコード】

N21681

【作者名】

ホチ

【あらすじ】

「今日家に来ない？」誘われちゃった……

僕、浅川達郎の川原岬への第一印象は「なんと豪快な人だ」の一
言に尽きる。

「名前、川つながりだね。趣味は？料理好きなの！？あたしも！
うん、君のこと気に入った！あたしと付き合おう！」

ここから岬先輩の僕への猛アタックが始まった。勢いのありすぎ
る岬先輩に対して、僕ときたら人生引っ込み思案で生きてきた。い
つも「僕でいいんですか」と心の中で首を捻っていた。

現在の僕らは恋人同士として付き合っている。もちろん岬先輩の
ことが大好きだ。だけど始まりの形は、完全に僕が岬先輩に押し負
けて半ば諦めからの付き合いだった。そんな僕らが付き合い始め
てそろそろ三ヶ月。今日僕は岬先輩の家に初めて招待された。

「浅川今日バイトなかったよね。だったらさ、ウチに来て一緒に
料理しない？」

「魅力的な提案ですけど、岬先輩って一人暮らしじゃないですよ
ね？家族の人に迷惑かかるんじゃないですか？」

「ああ、それは大丈夫。今日両親二人とも遅くなるみたいだから」
岬先輩、さらっと爆弾発言ですよ。岬先輩の家で僕ら二人きりに
なるってことじゃないですか。

「それでどうする？来るでしょ？来るよね。来たらきつと楽しい
よ」

「初めから僕が断るとは思っていないくせに……もちろんもちろ
ん喜んでお供しますよ」

岬先輩のことだ。本当にただ料理がしたいだけで他意はないのだ
ろう。今までも色っぽいイベントが起きそうな雰囲気の時も岬先輩
はどこまでもスルーしていたのだから。

「そうこなくっちゃ。浅川にはあたしの究極のメニューを振る舞

ってあげよう」

「それなら僕は至高のメニューを作りますよ」

「よし。浅川の授業が終わったらメールして。あたしはレポートでも書いて待ってるから」

わかりました、と返事をしてから僕は本日最後の授業がある教室へ向かった。

「ところで岬先輩の家ってどこなんですか？」

そういえば聞いていなかった。学校を先輩と出た後、駅に向かいながら僕は訊いた。

「言ってなかったっけ？祐天寺だよ」

東横線の駅だよ。先輩は教えてくれた。僕のアパートは埼京線沿いだったので、あいにく祐天寺と言われてもピンとこなかった。

「まずは渋谷だね、それから乗り換え。浅川はあたしの後ろについてくるだけでいいから」

「岬先輩、それ本来は男の僕が言う台詞です」

相変わらず男らしい人だ。初対面のとときから薄々気付いていたが、岬先輩は黙って俺に付いてこいタイプの性格なのだ。――まあ僕はその部分にも惚れているのだけれども。

「そう？だって浅川は道知らないでしょ？」

「そうですけど……。僕の立つ瀬がないじゃないですか」
山手線に揺られ渋谷に来たが、この場所から人がいなくなること
は果たしてあるのだろうか。今日も変わらずゴミゴミしている。

「ほら、こっちこっち」

岬先輩はスイスイ人混みをかき分けて先を歩いていく。

「岬先輩っ、ちょっと待って」

離されて少し焦る。東京の人混みには馴れたつもりだったのに。

「しょうがないな。ほら」

岬先輩が僕の手をぎゅと握った。――やっぱり立場逆だな、岬先輩カッコ良すぎますよ。

「祐天寺って遠いんですか？」

東横線のホームで僕は尋ねた。

「渋谷からは一駅だからすぐ。五分もかからない。ただそこからあたしの家まではちょっと歩くね。十五分くらいかな、我慢できるよね？」

「それくらいは大丈夫ですよ。いくつだと思ってるんですか」

「ごめんごめん」

岬先輩がからかい口調で笑っているうちにホームに電車がやってきた。

たしかに岬先輩の家までは結構な距離があった。途中買い出しもしたため一時間近くかかったかもしれない。日もだいぶ落ちてきた。

「あそこ曲がった所が家だから」

「たしかにちよつと距離ありましたね」

「へバったの？ だらしないな、浅川は」

「荷物全部僕にまわしておいてよく言いますね。岬先輩手ぶらじゃないですか！」

「そこはホラ、浅川君は男の子でしょ。はい、着きました。ご到着」

「調子いいんだから………岬先輩ってお嬢様だったんですか？」

岬先輩の家デカイ。都内なのに田舎の僕の実家より大きいじゃないか。

「昔からこの土地に住んでいるだけだよ。お父さんは普通のサラリーマンだしお母さんはパートで働いてるよ」

「そうなんですか………」

それを聞いて安心するのは失礼だろうか。けどもし自分の彼女

の正体がお嬢様だったらと思うとぞっとする。今まで僕は岬先輩との食事では安いメニューばかり注文していた。岬先輩がそれに無理して合わせていたとしたら……。

「遅くなっちゃたからパパッと作っちゃおう」と岬先輩は僕から買い物袋をとって台所へ直行した。

「やっぱり僕みたいな一人暮らしとは違いますね。キッチンはいし、調理器具も沢山ある。コンロも三つありますもんね」

「コラ浅川、見てないで手伝え。手え洗ったら食材どんどん切っちゃって」

「了解です」

メニューは買い出しのときにチャーハンと餃子に決まった。若い兄ちゃんが好きそうな定番メニューだが、岬先輩によると「家には中華鍋（浅川持っていないだろ）もあるし餃子は我が家独特の海鮮風絶品チャーハンと新しい餃子を体験させてあげるわ」と自信満々だった。

料理の最中はお互いあまり喋らなかった。僕は岬先輩の必要最低限の指示に従っているだけだ。だけど悪い気はしない。むしろ居心地が良い。無言で会話を楽しんでいるみたいだ。「二人初めての共同作業」そんな言葉が頭に浮かんた。そのせいで指を切ってしまいうようになったが、それは余談。

「岬先輩、それすごいですよっ！」

「まあね、馴れよ馴れ」

岬先輩は中華鍋を片手でたやすく扱っている。使ったことがないからわからないが、かなり重いはずだ。

「こっちはもう良さそうね」

僕が隣にあるフライパンの蓋を開けると餃子が良い具合に焼きあがっていた。

「さあ浅川、腕の見せ所だよ。餃子綺麗にフライパンから剥がして。羽つきで」

「そんなこと言われたら緊張しちゃいますよ」

よっ………と。よし！成功、かな？羽はパキパキに割れてしまった。

「……よし、こっちも完成っ」と岬先輩も火を止めた。「盛り付け開始よ」

「それでは………いただきます！」岬先輩の号令がかかった。

「いただきます」

腹ぺこだ！まずはチャーハンから。

「美味しい。ちゃんとお米パラパラになってますよ。僕いつもベチャってなるのに」

「あたしの腕プロ級だから」

「マジですごいです。こっちの餃子は………確かに新しい味ですね。僕こんな餃子食べたことないですよ」

「で、美味しいの？」岬先輩がジロリと僕を見る。

「もちろん美味しいです」

「よかった」

「この味はやっぱりエビですか？」

「そうだね、だけどエビ以外にも魚介類がいろいろ入ってるよ。」

割合はその日の食材次第でだいぶ左右されるかな」

「へー、これ僕も今度試してみますね」

「簡単だよ。お肉の代わりに魚介類入れるだけだから」

「メモメモっと」頭に入力。

「浅川の料理好きはやっぱりいいわー。料理しない人って美味しいとか不味いしか言わないから嫌。どうやって作ったのって調理法まで訊いてくれる方が絶対嬉しいし、作りがいある」

「僕そんなこと考えたこともなかったです。だけどそれで岬先輩が喜んでくれたなら嬉しいです」

「それにしてもよかったー、浅川に初めて食べさせるのはこれっ

て決めてたんだ。味が合わなかったらどうしようかと内心冷や汗だったんだ」

「岬先輩が作ってくれる料理ならきつとなんでも美味しいですよ」

「お世辞はいりません」

ちえ、本心なのにな。だけど味の好みが一致するのは良いことだ。これが違うと致命的だからな。

「次回は僕ん家のスペシャルメニューをご馳走しますね」

「うん、楽しみにしとく」

どんなメニューかはその日まで秘密にしておいて、と岬先輩には釘を刺されてしまった。

「ご馳走様でした。……だいぶ遅くなっちゃいましたね。岬先輩の家族の人が帰ってくる前にお暇します」

疲れて帰ってくるのに僕みたいな奴が家にいたらアレだろう。

「――大丈夫だよ」

「大丈夫って、遅くなるっていつてもさすがにそろそろ帰ってくるんじゃないんですか？」

もう夜の九時はずっとに過ぎている。

「――今日は帰ってこないよ」

え！？

「お父さんが遅い休暇取って、今はお母さんと旅行行ってるんだ。だから今日は帰ってこない」

「それって……」

「朝まで二人きりってこと」

何という殺し文句！そして破壊力！！

「いいんですか？そんなこと言って……」

「浅川は料理得意のくせして何もわかつちやいない。鮮度つてもんがあるでしょ。腐りたいのか、アホ。どれだけ消極的なのか。引っ込み思案ってだけで何でも許されると思ったら大間違いだ」

「すみません．．．．．いろいろ」

「バカ！ーむちゃくちや恥ずかしいんだぞ！」

「．．．．．もう無理ですからね。今更やっぱなしは駄目ですよ。ここまできたら僕止まれませんからね」

「当たり前だ！女にここまでさせておいて尻込みなんてしてみろ、あたしはあんたを殺すぞ！」

「わかりました．．．．．近くのコンビニの場所教えてください」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「おはよう、浅川」

「ーそっか、これが朝チュンか。」

「おはようございます。岬先輩」

「違うでしょ。昨日言ったこと忘れたの？あたしのことどう呼んだっけ？」

やり直し、もう一回と命令された。

「お、おはよう、岬」

「よし！」

満足げに岬先輩「ー岬」は頷いた。．．．．．僕は「浅川」のままなんですな。

「浅川って以外と狼さんだね」

「っ!!」

「あたし驚いちゃった」

「違いますよ!」

「どう違うの?」

「あれは! 昨日の餃子に入ってたニンニクのせいです!」

それを聞いた岬はニンヤリした。

「おっかしいな。昨日はニンニク入れなかったはずだけどなー
!」

「・・・!!」

すっかり秋の季節になったというのに暑くて汗が噴き出す。僕は、きつとこの人には一生敵わないだろう。

「どうした? 黙りこんじゃって。ほらほら! 学校行くよ」

寝不足のせいかな? 岬はいつにも増して眩しく見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2168i/>

初めて

2010年12月8日02時31分発行